

昭和52年度（問 題）

〔午前の部〕

1. 平均値 μ_1 , 分散 σ_1^2 の母集団 π_1 からとられた大きさ m の標本の標本平均を \bar{X} とし, 平均値 μ_2 , 分散 σ_2^2 の母集団 π_2 からとられた大きさ n の標本の標本平均を \bar{Y} とする。いま, 平均値の差 $\mu_1 - \mu_2$ の推定量として $\bar{X} - \bar{Y}$ をとるとき, 全体の標本の大きさ $N = m + n$ が一定であるという条件のもとで, 分散をできるだけ小さくするには, m , n をどのように選べばよいか。
2. 指数分布 $f(x; \lambda) = \lambda e^{-\lambda x}$ ($x \geq 0$) に従う母集団から一つの標本をとり出して, $x = 2$ という値を得た。信頼係数90%で λ の信頼区間を求めよ。
必要ならば $\log_e 0.95 = -0.05$, $\log_e 0.05 = -3.00$ を用いてよい。
3. 母集団分布は正規分布 $N(m, \sigma^2)$ とし, σ^2 は既知とする。有意水準 0.01 による仮説 $m = m_0$ の右側検定で, $m = m_0 + \sigma/4$ のときに第2種の誤りの確率が 0.05 となるように標本の大きさを定めよ。
なお, Z が $N(0, 1)$ に従うとき $P(Z > 2.33) \doteq 0.01$, $P(Z < -1.65) \doteq 0.05$ である。

〔午後の部〕

4. 硬貨を n 回投げて x 回表が出たとき, 表が出る確率 p を推定するものとする。表の出る回数を表わす確率変数を X とするとき, p の不偏推定量は $\hat{p} = \frac{X}{n}$ に限られることを示せ。
5. x_1, x_2 はそれぞれ Poisson 分布 $Po(\lambda_1), Po(\lambda_2)$ (ここに λ_1, λ_2 は未知) に従う互いに独立な確率変数 X_1, X_2 の実現値とする。
 - (i) $X_1 + X_2 = r$ (定数) という条件のもとで, X_1 の条件つき分布を求めよ。
 - (ii) 次に, $r = 6$ のもとで実現値が $x_1 = 4, x_2 = 2$ である場合, 仮説 $2\lambda_1 = \lambda_2$ を有意水準 5% で検定せよ。

昭和52年度（解答例）

1. まず $\bar{X} - \bar{Y}$ の分散 $V(\bar{X} - \bar{Y})$ を求める。題意より、

$$V(\bar{X}) = \frac{\sigma_1^2}{m}, \quad V(\bar{Y}) = \frac{\sigma_2^2}{n}$$

であることと、 X と Y との独立性より、

$$\begin{aligned} V(\bar{X} - \bar{Y}) &= V(\bar{X}) + V(\bar{Y}) \\ &= \frac{\sigma_1^2}{m} + \frac{\sigma_2^2}{n} \\ &= \frac{\sigma_1^2}{m} + \frac{\sigma_2^2}{N-m} \dots\dots\dots (1) \quad (\because N = m + n) \end{aligned}$$

である。

この分散を最小にする m を求めるために(1)式を m で微分すると、

$$\frac{\partial V(\bar{X} - \bar{Y})}{\partial m} = -\frac{\sigma_1^2}{m^2} + \frac{\sigma_2^2}{(N-m)^2} \dots\dots\dots (2)$$

(2)式を0にするような m が求める m である。

$$\therefore \frac{\sigma_1^2}{m^2} = \frac{\sigma_2^2}{(N-m)^2}$$

両辺の正の平方根をとると、

$$\frac{\sigma_1}{m} = \frac{\sigma_2}{N-m}$$

$$\therefore m = \frac{\sigma_1}{\sigma_1 + \sigma_2} N$$

これから、

$$n = \frac{\sigma_2}{\sigma_1 + \sigma_2} N$$

$$\text{答} \left\{ \begin{array}{l} m = \frac{\sigma_1}{\sigma_1 + \sigma_2} N \\ n = \frac{\sigma_2}{\sigma_1 + \sigma_2} N \end{array} \right.$$

2. 90%の信頼区間を求めるために、左右5%の棄却域を求める。

$$\left\{ \begin{array}{l} \int_0^a f(x; \lambda) dx = 0.05 \quad \dots\dots\dots (1) \\ \int_b^\infty f(x; \lambda) dx = 0.05 \quad \dots\dots\dots (2) \end{array} \right.$$

を満たす a , b を求めると、

$$P_r(a \leq X \leq b) = 0.90 \quad \dots\dots\dots (3)$$

となる。

ところで、

$$\begin{aligned} \int f(x; \lambda) dx &= \int \lambda e^{-\lambda x} dx \\ &= -e^{-\lambda x} \end{aligned}$$

だから、(1)式から、

$$\begin{aligned} 1 - e^{-a\lambda} &= 0.05 \\ \therefore e^{-a\lambda} &= 0.95 \\ \therefore a &= \frac{0.05}{\lambda} \end{aligned}$$

また(2)式より、

$$\begin{aligned} e^{-b\lambda} &= 0.05 \\ \therefore b &= \frac{3}{\lambda} \end{aligned}$$

この a , b を用い、(3)式の X に $x = 2$ を代入すると、

$$\begin{aligned} \frac{0.05}{\lambda} \leq 2 \leq \frac{3}{\lambda} \\ \therefore 0.025 \leq \lambda \leq 1.5 \end{aligned}$$

これが求める信頼区間である。

答 $0.025 \leq \lambda \leq 1.5$

3. 帰無仮説は $H_0: m = m_0$, 対立仮説は $H_1: m > m_0$ である。大きさ n の標本変数平均を \bar{X} で表わすとき、帰無仮説 H_0 の $\varepsilon = 0.01$ の右側検定では、 \bar{X} が $N(m_0, \frac{\sigma^2}{n})$ に従うことから、題意より、

$$Pr\left(\frac{\bar{X} - m_0}{\sqrt{\frac{\sigma^2}{n}}} > 2.33\right) \approx 0.01$$

であり、従って $\bar{X} < m_0 + 2.33 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}$ のとき H_0 を採る (棄てない) ことになる。

ところで、 $m = m_0 + \frac{\sigma}{4}$ とすると、 \bar{X} は $N\left(m_0 + \frac{\sigma}{4}, \frac{\sigma^2}{n}\right)$ に従うことになり、そ

のときの第 2 種の誤りの起る確率は次のようになる。

$$\begin{aligned} & Pr\left(\bar{X} < m_0 + 2.33 \frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right) \\ &= Pr\left(\frac{\bar{X} - \left(m_0 + \frac{\sigma}{4}\right)}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} < 2.33 - \frac{\sqrt{n}}{4}\right) \end{aligned}$$

この確率が 0.05 となるのは題意より、

$$2.33 - \frac{\sqrt{n}}{4} = -1.65$$

のときである。これより n を求めると、

$$n \approx 254$$

答 約 254

4. \hat{p} が p の不偏推定量であることは明らか。

その一意性を以下で示す。

X の関数 $r(X)$ が p の不偏推定量であるとすると、

$$E(r(X)) = p$$

$$\therefore \sum_{x=0}^n r(x) {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x} = p \quad (0 \leq p \leq 1) \dots\dots\dots (1)$$

(1)式で $p=0$ とすると、

$$r(0) = 0$$

故に(1)式は、

$$\sum_{x=1}^n r(x) {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x} = p \quad (0 \leq p \leq 1) \dots\dots\dots (2)$$

と表わせる。

次に(2)式の両辺を p ($0 < p < 1$) で割ると,

$$\sum_{x=1}^n r(x) {}_n C_x p^{x-1} (1-p)^{n-x} = 1$$

$x-1 = y$ とおくと,

$$\sum_{y=0}^{n-1} r(y+1) {}_n C_{y+1} \left(\frac{p}{1-p} \right)^y = (1-p)^{-(n-1)}$$

$q = \frac{p}{1-p}$ とおくと,

$$\begin{aligned} \sum_{y=0}^{n-1} r(y+1) {}_n C_{y+1} q^y &= (1+q)^{(n-1)} \\ &= \sum_{y=0}^{n-1} {}_{n-1} C_y q^y \end{aligned}$$

両辺を比較して,

$$\begin{aligned} r(y+1) {}_n C_{y+1} &= {}_{n-1} C_y \\ \therefore r(x) &= r(y+1) \\ &= \frac{{}_{n-1} C_{x-1}}{{}_n C_x} \\ &= \frac{x}{n} \quad (\text{証明おわり}) \end{aligned}$$

5. (i) X_1 と X_2 は独立だから Poisson 分布の再生性により,
 $X_1 + X_2$ は Poisson 分布 $\text{Po}(\lambda_1 + \lambda_2)$ に従う。

$$\therefore P_r(X_1 + X_2 = r) = \frac{(\lambda_1 + \lambda_2)^r}{r!} e^{-(\lambda_1 + \lambda_2)}$$

また, $k = 0, 1, 2, \dots, r$ について次式が成り立つ。

$$\begin{aligned} &P_r\{(X_1 = k) \cap (X_2 = r-k)\} \\ &= P_r(X_1 = k) P_r(X_2 = r-k) \\ &= \frac{\lambda_1^k \lambda_2^{r-k}}{k! (r-k)!} e^{-(\lambda_1 + \lambda_2)} \end{aligned}$$

$$\therefore P_r(X_1 = k | X_1 + X_2 = r)$$

$$\begin{aligned}
&= \frac{P_r\{(X_1 = k) \cap (X_2 = r-k)\}}{P_r(X_1 + X_2 = r)} \\
&= \frac{r!}{k!(r-k)!} \left(\frac{\lambda_1}{\lambda_1 + \lambda_2}\right)^k \left(\frac{\lambda_2}{\lambda_1 + \lambda_2}\right)^{r-k}
\end{aligned}$$

よって X_1 の条件付分布は二項分布 $B_i\left(r, \frac{\lambda_1}{\lambda_1 + \lambda_2}\right)$ である。

(ii) 仮説 $2\lambda_1 = \lambda_2$ が正しいとすると、(i)より、

$$P_r(X_1 = k | X_1 + X_2 = r) = \binom{r}{k} \left(\frac{1}{3}\right)^k \left(\frac{2}{3}\right)^{r-k}$$

である。いま $r = 6$ で実現値 $k(= x_1) = 4$ であるが、

$$\sum_{k=4}^6 \binom{6}{k} \left(\frac{1}{3}\right)^k \left(\frac{2}{3}\right)^{r-k} = \frac{73}{729} \approx 0.1 > 0.05$$

となり、実現値 $x_1 = 4$, $x_2 = 2$ は有意水準 5% の棄却域に入らない。よって仮説 $2\lambda_1 = \lambda_2$ は棄却されない。